

久留米城下町遺跡

(亀屋町)

—第18次発掘調査報告—



平成24年（2012）3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、古代から政治、軍事、宗教、経済の拠点として発展を遂げてきており、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

久留米市は平成元年の久留米城下町遺跡三本松町地区の調査を皮切りに、約20年間にわたって近世の城下町や侍屋敷の発掘調査を行ってきました。これにより、久留米藩の藩都として栄えた久留米の街の様子や人々の足跡があきらかになり、久留米市の地域資源として活用すべき材料が着々と蓄積されてきています。この成果を活かして、今後の久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できることを願っております。また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました地権者様をはじめ、周辺住民の皆様に心より御礼申し上げます。

平成24年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成23年度に九電不動産株式会社の委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭・大淵文子が行い、浄書は古賀和子・林知恵・石崎玲子が行った。また遺物の実測は林が、浄書は古賀が行った。
3. 遺構写真は、マミヤRB67を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラを用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S Dー溝、S Eー井戸、S Kー土坑、S Pーピット、S Xー作業場遺構を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はL K Mー18、調査番号は201102である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。
9. 表紙挿図は『天保年間図』であり、○印は本調査地を示す。

本 文 目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	
2. 調査の体制	
3. 調査の目的と経過	
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
1. 検出遺構	
2. 出土遺物	
IV. まとめ	23

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）	2
第2図 延宝八年図（部分）	3
第3図 天保年間図（部分）	3
第4図 久留米城下町遺跡第18次調査区位置図	4
第5図 本調査区と周辺の町割復元図	4
第6図 久留米城下町遺跡第18次調査遺構配置図	5
第7図 石列1 検出状況（西から）	6

第8図	S K 40、S K 51 b 遺構実測図 (1/40)	6
第9図	S D 8 完掘状況 (南西から)	7
第10図	S D 53 トレンチ (南から)	7
第11図	S D 53 底面 (南から)	7
第12図	S K 5 完掘状況 (北から)	7
第13図	S K 6 完掘状況 (南東から)	8
第14図	S K 7 完掘状況 (南西から)	8
第15図	S K 39 (手前) S K 51 b (奥) 完掘状況 (東から)	8
第16図	調査区近景 (北から)	8
第17図	S K 40 完掘状況 (北東から)	9
第18図	S K 51 c ・ d 完掘状況 (西から)	9
第19図	S E 13 (手前) S E 38 (奥) 完掘 (西から)	9
第20図	S X 1 検出状況 (南から)	9
第21図	S E 13、S E 38 遺構実測図 (1/40)	10
第22図	S X 60 検出状況 (北西から)	11
第23図	S K 2 出土ウリ科種子 (南東から)	11
第24図	調査区近景 (北東から)	11
第25図	調査区遠景 (南西から)	11
第26図	調査風景 (南東から)	11
第27図	S D 8 出土遺物実測図 (1/4)	11
第28図	S K 51 c ・ d、S D 53、S K 39、S D 8 土層断面図、基本土層図、S X 60 実測図 (1/40 ・ 1/20)	12
第29図	出土遺物写真 1	13
第30図	出土遺物写真 2	14
第31図	出土遺物写真 3	15
第32図	出土遺物写真 4	16
第33図	出土遺物写真 5	17
第34図	出土遺物写真 6	18
第35図	久留米市明細図	24
第36図	田中代の久留米城下町概念図 (久文報第74集より)	24
第37図	久留米市土地寶典 (部分)	25
第38図	久留米藩領図屏風 (部分)	25
第39図	旧河川復元図	25

表 目 次

第1表	出土遺物観察表 1	19
第2表	出土遺物観察表 2	20
第3表	出土遺物観察表 3	21
第4表	出土遺物観察表 4	22
第5表	久留米城下町遺跡第18次調査出土瓦数	25

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成23年1月28日、地権者の九電不動産株式会社から、久留米市城南町8-14における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城下町遺跡内にあたり、今回の調査地においても、町家内の遺構が残存している可能性が高いと考えられたため、同年2月14日発掘調査が必要である旨回答した。平成23年3月20日、地権者である九電不動産株式会社より発掘調査の依頼が提出され、それを受けて同年4月25日九電不動産株式会社と久留米市長権原利則は、発掘調査、整理、報告書作成費用の負担は原因者が負担することを確認し、久留米城下町遺跡第18次調査の委託契約を締結した。これにより、平成23年5月16日より、発掘調査を開始した。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部

部 長：辻 文孝

次 長：佐藤 光義

文化財保護課

課 長：立石 雅文

課長補佐兼課主査：宮崎 俊一 古賀 正美 園井 正隆

課 主 査：白木 守

事務主査：近澤 康治

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：江頭 俊介

整理担当：古賀 和子

発掘調査臨時職員

秋永 絹子、大淵 文子、川原 初美、古賀 勝治、佐藤 朱美、田中 とし子、中野 ゆみ、藤井 佳都子、溝口 輝男

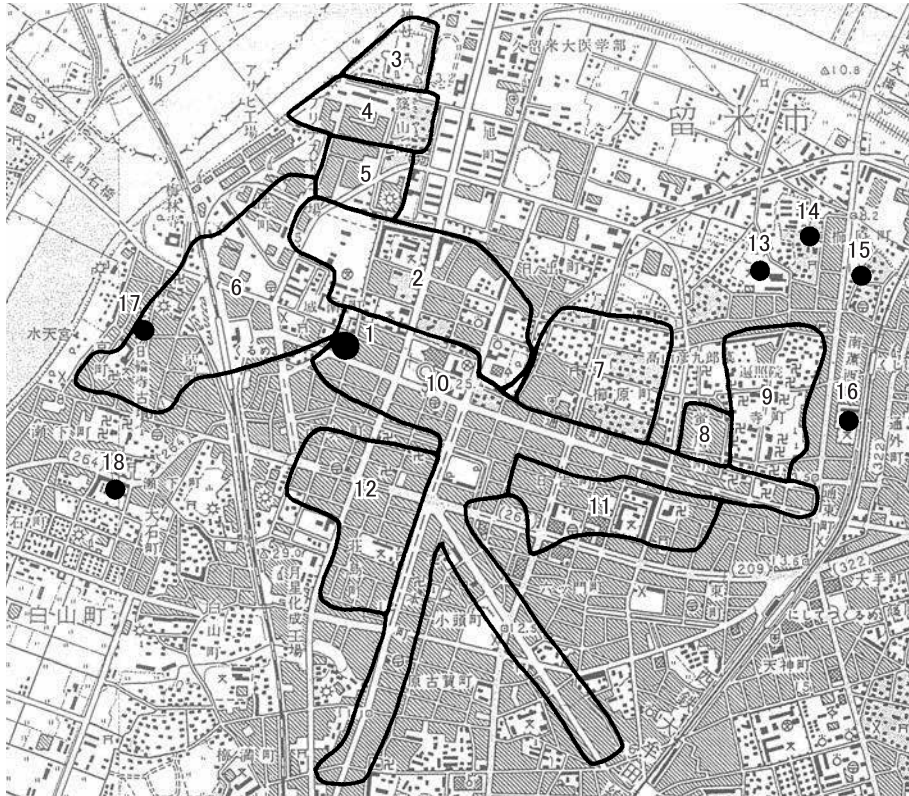
発掘調査整理臨時職員

石橋 和子、半田 一衣、石崎 玲子、林 知恵

3. 調査の目的と経過

調査地は、久留米城大手門の南東、旧亀屋町の西端に所在する。近世の町家の状況を確認することを目的とした調査である。平成23年5月16日、重機による表土剥ぎを行った。北側は現代の建物基礎により破壊されていた。地表下約1mで近世の遺構面を検出した。南側の一部にしか地山が残っていないほど遺構密度は高い。梅雨時期の低湿地の調査とあって、水抜きに時間を割かれ進捗は悪かったが、平成23年7月30日に遺構の掘削、各記録の作成を終え、調査を完了し、翌年3月31日まで整理と報告書作成を行った。遺構実測はトータル・ステーションで行い、株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。

Ⅱ. 位置と環境



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 調査地点
2. 久留米城外郭遺跡
3. 久留米城本丸
4. 久留米城二ノ丸
5. 久留米城三ノ丸
6. 京隈侍屋敷遺跡
7. 櫛原侍屋敷遺跡
8. 鉄砲小路遺跡
9. 寺町
10. 久留米城下町遺跡
11. 十間屋敷遺跡
12. 庄島侍屋敷遺跡
13. 東櫛原今寺遺跡
14. 石丸遺跡
15. 辻遺跡
16. 南薫西遺跡
17. 日輪寺古墳
18. 速水遺跡

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化の中心を占めた。近世には、毛利氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在まで県南の中核都市として発展している。

本調査区が位置する久留米市北西部は、筑後川が東から流れ、直角に南に向きを変える地点の左岸に位置し、北側へ突出する台地と、その周りの沖積地とで構成されている。市内から流れ出る池町川が筑後川へ合流する最西部においては、低湿地が形成されている。本調査地は、筑後川へ突出する台地の南東側の縁辺からわずかに外側にあたり、標高は8m台であり、周囲よりも低い場所になる。北に隣接する篠山地区はやや高く、南側の庄島地区とともに、標高10～12mを測る。

本調査地の北に隣接する明善高校校庭遺跡は、弥生時代の遺物散布地である。東側の櫛原地区や西側の京隈地区には弥生中期の甕棺墓群が検出されており、現久留米城本丸周辺に弥生時代の集落の存在が示唆されている。本調査地から300mほど西には、6世紀の装飾古墳である日輪寺古墳があり、周辺から古墳後期から奈良時代の遺物が時折出土するが、明確な遺構は検出されていない。古代には、御井郡と三潞郡の境にあたり、本調査区は三潞郡に属する。

古代末から中世には、周囲には荘園が形成され、西に隣接する櫛原地区は960年成立の安楽寺領櫛原荘となり、三潞郡は1159年には宝荘厳院領三潞荘となった。久留米城付近一帯は、中世末期に

は高良山勢力の拠点となっており、中世のある段階で高良山領となっている可能性も考えられる。

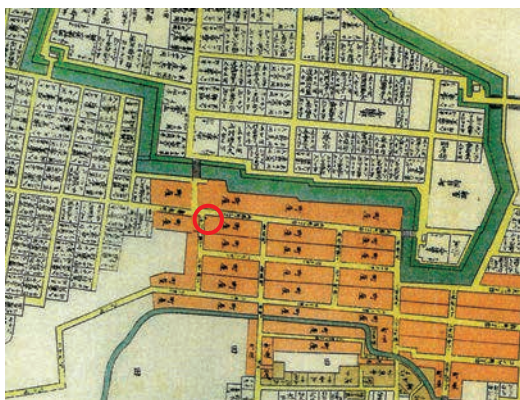
中世において筑後川流域には、貿易陶磁器を多く出土する遺跡が各所に見られ、肥前神埼荘や、高良山門前の二本木遺跡群などに代表される。本調査地は、筑後川が長門石地区の西側へ蛇行する屈曲部にあたり、筑後川を挟んで西側には、肥前一ノ宮である千栗八幡宮の門前町が対峙している。近世初頭には川湊として機能した洗切が、その屈曲部に存在したことから鑑みると、中世においても本調査区を含む久留米西北部が、有明海を経由した対中貿易の拠点の一つとして、一般集落よりもいくぶんか発展した景観を成していたことも考えられる。また、長門石の地名伝承は、筑後川河畔に形成された川湊の様子を伝えている。

天正11年（1583）には、高良山座主の弟麟圭が、龍造寺方として久留米城に籠り、兄の高良山座主良寛ら大友方と三年間対峙したとあり、このころには高良山勢力の一拠点としての久留米城が建設されていたようである。秀吉の九州仕置きの際に久留米城に毛利秀包が入城し、麟圭は謀殺された。毛利秀包は、肥後国人一揆や朝鮮出兵を経て関が原敗戦までの14年間在城する。この間の久留米城の縄張りや城下町の町割については明らかでないが、平成3年の両替町遺跡の調査（久文報第116集）において毛利氏時代の教会建物の遺構が検出されており、城下町の姿が断片的にとらえられる。

関ヶ原の合戦後は、その恩賞として筑後一国を与えられた田中吉政によって久留米城が整備された。柳川城が本城となり、支城の久留米城と福島城はそれぞれ道路で結ばれた。田中氏代の久留米城は、福島城や城島城のように、本丸を中心として周囲に侍屋敷や城下町が廻り、濠で囲まれた構造をとっていたと考えられている。正面は東を向き、府中へ向かう街道と柳川へ向かう街道を軸として、内町、元町、三本松町、などが存在し、城の西側には洗切があったと考えられている。平成3年の両替町遺跡の調査（久文報第116集）において田中氏時代の濠が検出されている。

田中氏が二代忠政の嗣子が無く断絶したのち、有馬豊氏が1621年に筑後北半国21万石の領主として入封し、明治まで久留米を治めた。このときから大規模な造成工事をおこない、現在に残る城下町を形成した。1640年代までには城郭、城下町ともに一定の完成を見たようであり、のちに城下町は、通外町や原古賀町、小頭町へ拡大した。

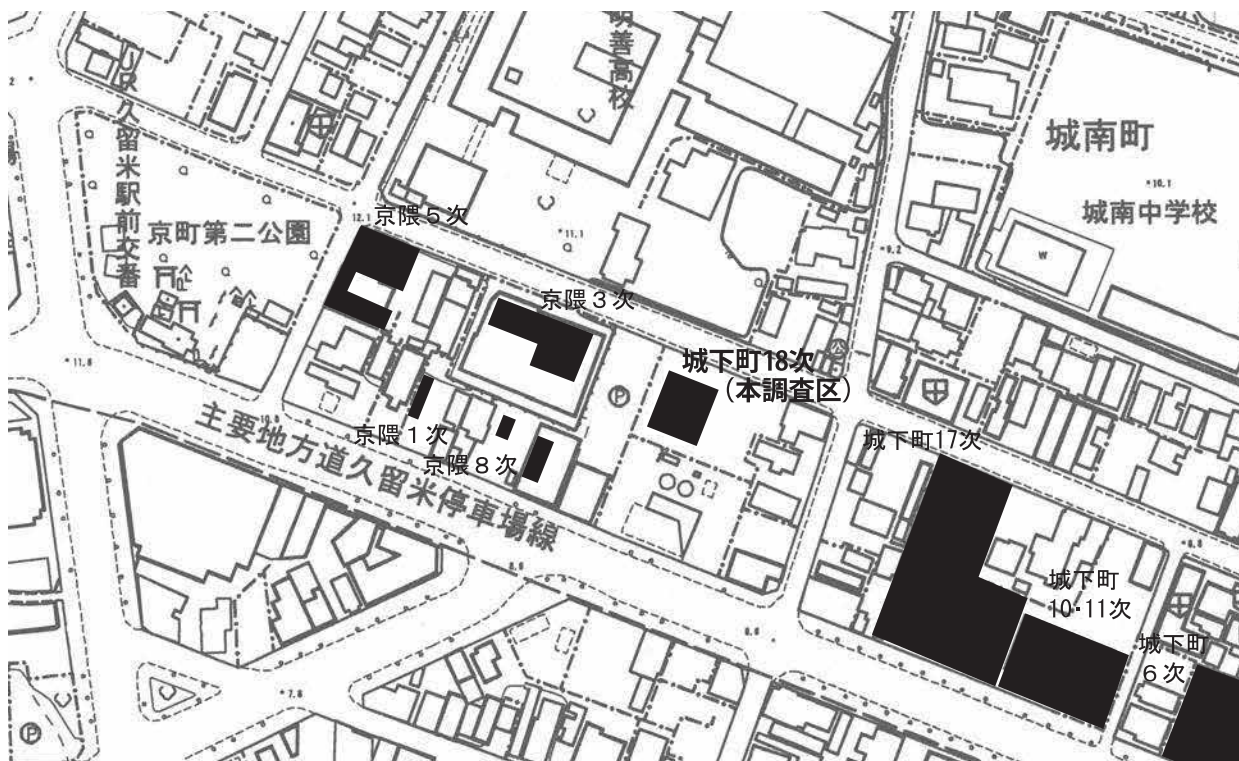
本調査地は大手門前を東西に延びる亀屋町の西端にあり、南側へ向かう築島新町との角地である。



第2図 延宝八年図（○は調査地点）



第3図 天保年間図（○は調査地点）

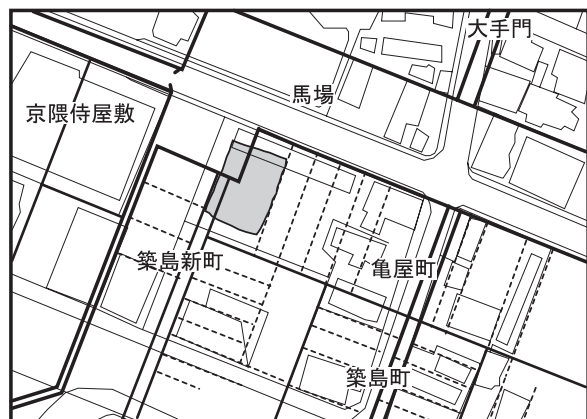


第4図 久留米城下町遺跡第18次調査区位置図 (1/2, 500)

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査は、亀屋町の西端、築島新町との角の町屋跡を対象とした。敷地は近世の町屋の区画が、近代以降2～3区画まとめられているようである。この敷地のうち建物建設部分である西側の15m×25mの範囲に調査区を設定して調査を行った。屋敷境と考えられる近世の石列2条、古代の溝1条、近世前期以前の溝1条、近世の土坑31基、井戸2基、作業場遺構2基が検出された。その他ピット等が検出された。調査区は、現在の道路の端から5mほど南側にあり、さらに調査区内の北側4mほどは社宅基礎によって破壊されているため、南北に長い町屋の敷地の中央から奥（南側）にかけての裏庭にあたる場所を調査したことになる。道路に面して建っていたであろう町屋建物は検出できなかった。南北方向の屋敷境は、石列1、2と、調査区南東隅の石列3がそれぞれにあたりと考えられるが、調査区南東隅の石列3は、調査区の東端のラインと偶然にも重なってしまい、表土剥ぎ時に検出することが出来ず掘削してしまった。南東隅の石列3から西側の石列2までの範囲が亀屋町西端の町屋にあたり、石列2より西側は築島新町の南北道であると考えられる。石列1の屈曲は、木戸前の馬場の南東角と考えられる。



第5図 本調査区と周辺の町割復元図



第6図 久留米城下町遺跡第18次調査遺構配置図 (1/150)

石列 1（第 6・7 図）

調査区北東から東へ向かい調査区中央西寄り付近で北へ直角に折れる。検出した長さ 8 m、幅 0.8 m である。20～40 cm 大の礫が列を成しており、石の間は漆喰で固められている。石囲いの溝の底部と考えられる。後世の整地によって上部を失っている。

石列 2（第 6 図）

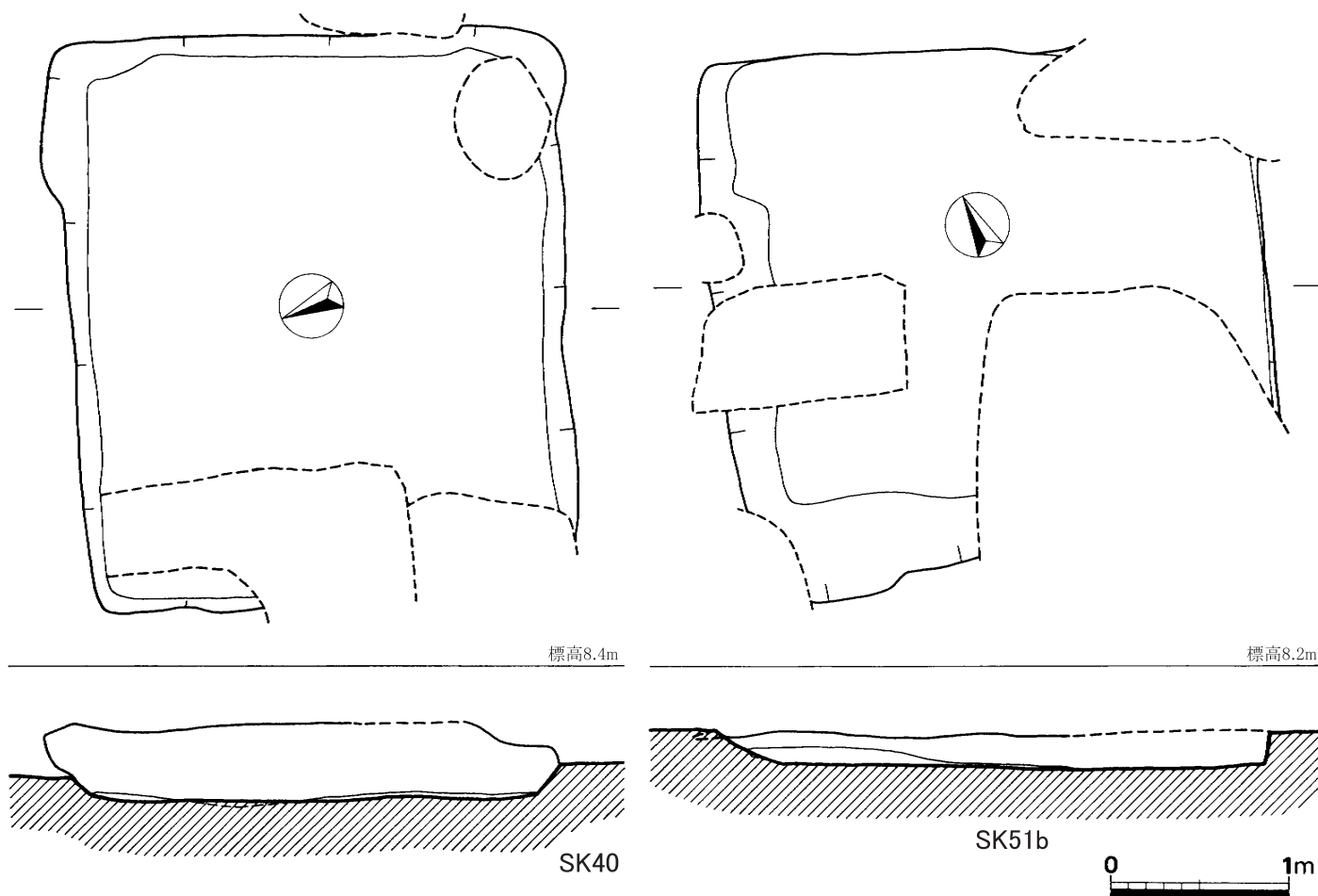
調査区西側を南から北へ直線的に延びる石列であり、検出した長さは、7 m、幅は 0.6 m である。南側は、栗石の上に切石が二個残っているが、それ以外の部分は、栗石のみである。

石列 3（第 6 図）

調査区南東隅の土留めのために残した段差上から検出した。他の遺構を検出したレベルから 0.3 m ほど上にある。調査区東壁のラインと偶然重なってしまい、表土剥ぎの時点で認識することが出来なかった。後に写真撮影のため清掃中に検出された。円礫の栗石の上に切り石が並んでおり、屋敷境を成している溝の西壁と考えられる。検出した長さは 1.6 m、幅 0.6 m である。



第 7 図 石列 1 検出状況（西から）



第 8 図 S K 40、S K 51b 遺構実測図（1/40）

溝

SD8（第6・9・28図）

調査区北東から南西へ向かって直線的に延びる溝である。長さ18m、幅は1.4m、深さは0.4m以上である。上部は近世の土坑等に削平されており、本来の深さは不明である。断面形状は丸味を帯びた逆台形であり、北西側には段差がある。埋土は4層に分けられ、3層上面と溝底面には鉄分が沈着しており、水路として機能していた時期が2時期あることが分る。土師器の坏（7）、壺（8）（製塩土器か）、7世紀～8世紀の須恵器（1～5）などが出土している。SK27、SE38、SK40、SK51bに切られる。

SD53（第6・10・11・28図）

調査区北東から南西へ向かって蛇行する溝である。調査区内での長さは13m、幅5.4m、深さ0.9mを測る。緩やかに南東に向かって傾斜しており、埋土は水平堆積している。平面断面ともに、その形状から、旧河川と考えられるが、もう一方の肩が調査区内に検出されておらず、沼、池などである可能性も残る。遺構底面には葦等の植物の樹痕と考えられる小ピットが多数ある。遺物は出土していない。この遺構を切るSP21から溝縁皿（131）が出土しており、遺構の時期は17世紀を遡るものと考えられる。SK39など近世の各遺構に切られる。

土坑

SK2（第6図）

調査区中央で検出した。長軸2.3m、短軸2.3m、深さ0.5mを測る土坑である。ウリ科種子（146）、染付碗（9、10）皿（15）、焼塩壺（21、22）、播鉢（23）、便所甕（24）等が出土している。SK34に切られ、SK51bを切る。廃棄年代は、幕末ごろと考えられる。

SK5（第6・12図）

調査区南西側で検出した。長軸1.3m、短軸1m、深さ0.6mを測る楕円形の土坑である。断面形状は半円形を呈する。18世紀後半の青磁染付碗が出土している。



第9図 SD8完掘状況（南西から）



第10図 SD53トレンチ（南から）



第11図 SD53底面（南から）



第12図 SK5完掘状況（北から）

SK6（第6・13図）

調査区南西側で検出した長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。断面形状は丸みを帯びた逆台形を呈する。18世紀代の遺物を含む。

SK7（第6・14図）

調査区中央西寄りで検出した隅丸方形の土坑である。長軸2.3m、短軸1.5m、深さ0.9mを測る。断面形状は逆台形である。SK51b、SD8を切っている。上面にSX60（砂漆喰製の水盤）が据え付けられている。広東碗（38）、盃（42）、鉢（49）、皿（52）、水滴（57）、面子（59）、土瓶（60）、瓶（61）など幕末主体とし、明治を下限とする多量の遺物が出土している。

SK27（第6図）

調査区南西側で検出した土坑である。長軸2.5m、短軸1.4m、深さ0.5mの楕円形を呈する土坑である。SK28、SD8を切っている。上製の土師器皿（135）が出土している。

SK29（第6図）

調査区南西側で検出した土坑である。長軸1.8m、短軸0.6m、深さ0.5m以上の楕円形を呈する土坑である。西に隣接する石列に切られる。

SK39（第6・28図）

調査区中央東寄りで検出した方形の土坑である。長軸3.6m、短軸2.6m、深さ0.4mである。当初SK51b、SK51c・dとともに切り合いが判別できず、SK51aとして掘削した。SK51bの立ち上がりが検出できた時点でそれぞれの遺構の範囲がわかったため、元の遺構の深さはこれより深い。北側をSE13に、西側をSK51bに、東側を明治期の攪乱によって切られる。SD53を切っている。埋土は2層に分けられ、1・2層ともに粘土質である。19世紀前半ごろの磁器の碗（66）、鉢（67）、瓶（70）、陶器皿（73）、鉢（76）、石臼（77）などが出土している。



第13図 SK6完掘状況（南東から）



第14図 SK7完掘状況（南西から）



第15図 SK39（手前）SK51b（奥）
完掘状況（東から）



第16図 調査区近景（北から）

SK40（第6・8図）

調査区中央北寄りで検出した方形の土坑である。敷地に沿った方向を向いており、長軸4m、短軸3.5m、深さ0.5mを測る。SD8を切っている。石列1の掘方によって上部を切られる。朝妻焼の皿、広東碗、「儀・くしや」と書かれた陶器の徳利などが出土している。

SK51b（第6・8・28図）

調査区中央で検出した方形の土坑である。敷地に沿った方向を向いている。長軸3.8m、短軸3.5m、判別できたレベルからの深さ0.3mである。SD8、SK39、SK51c・dを切っている。埋土は暗褐色粘土の単層である。壁の立ち上がりは直線的である。坂東寺系の火鉢、瓦、下駄などが出土している。

SK51c・SK51d（第6・28図）

調査区西側で検出した不整形の土坑である。長軸5.6m、短軸3.8m、深さ0.6mを測る。トレンチ断面の観察から北側と南側は別の遺構であると判断したが、平面形状が判別できなかったため、断面で判断した位置から北側をSD51d、南側をSD51cとして分けて掘削した。SD51cがSD51dを切っている。断面形状は、どちらも挿鉢状を呈する。埋土はともに6層に分けられ、灰色粘土が主体を占める。18世紀～19世紀前半の遺物が出土している。

井戸

SE13（第6・19・21図）

調査区東側で検出した。直径1mの漆喰製の井戸である。周囲に長軸2.5m、短軸1.8mの掘方を有する。井戸枠の内側を0.4m、掘方を0.2m掘り下げた。

SE38（第6・19・21図）

調査区東側で検出した。直径1mを測る素掘りの井戸である。深さ0.5mまで掘り下げた。周囲に長軸3.8m、短軸3m、深さ0.3mの掘方を伴う。SE13、SK40に切られ、SD8を切っている。朝妻焼の皿や蓋が出土している。



第17図 SK40完掘状況（北東から）



第18図 SK51c・d完掘状況（西から）



第19図 SE13（手前）SE38（奥）完掘（西から）



第20図 SX1検出状況（南から）

作業場遺構

S X1 (第6・20図)

調査区中央で検出した。直径0.4mの砂漆喰製の盆状の遺構であり、周囲の地表面に粘土が貼られている。S K51bの埋土上に据付けられており、木製の杵等で何かを潰すために用いたものと考えられる。

S X60 (第6・22・28図)

調査区中央南よりで検出した。S K7の上面に設置されている。長軸0.7m、短軸0.5m、高さ15cmの砂漆喰製の水盤と考えられる。平面形は長方形を呈し、南西側に傾斜している。最も低い南西隅が一段低くなっており、東側と南側に壁が立ち上がっている。この遺構で、水を使った何らかの作業をしていたと考えられる。

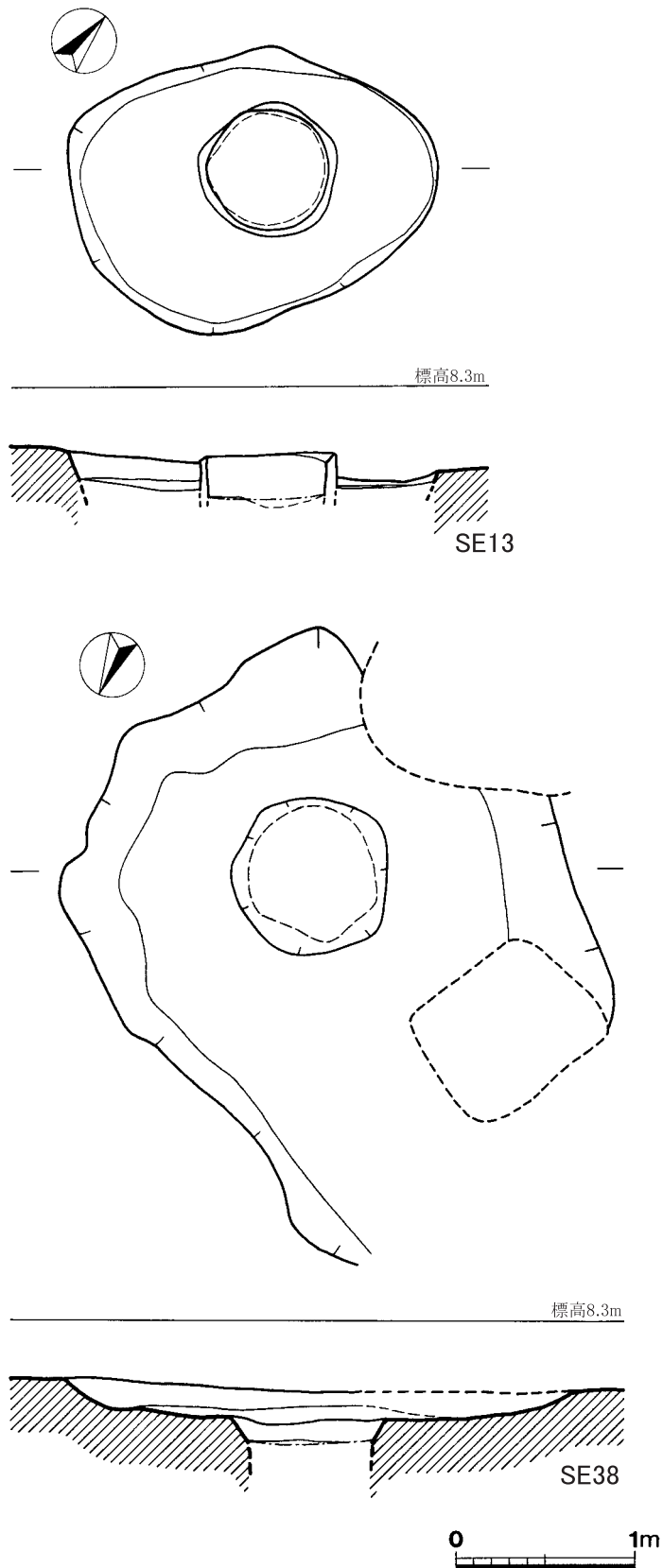
ピット

S P21 (第6図)

調査区南東で検出した。直径0.6mのピットである。S D53を切っている。溝縁皿が出土している。

2. 出土遺物

パンコンテナー20箱分の遺物が出土した。報告しきれなかった遺物を含め大多数が18世紀以降の遺物である。陶磁器のほか、木器、石臼、砥石転用硯、ウリ科種子、マツ種子、瓦などが出土している。朝妻焼が多く、S E38、S K40などから出土している。また、坂東寺系の火鉢や内曇りの土師器皿などが出土している。



第21図 SE13、SE38遺構実測図 (1/40)



第22図 S X60検出状況（北西から）



第23図 S K 2出土ウリ科種子（南東から）



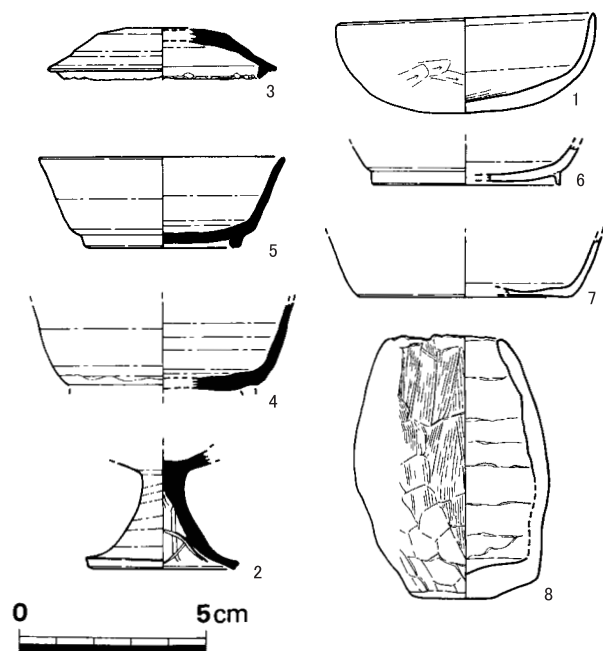
第24図 調査区近景（北東から）



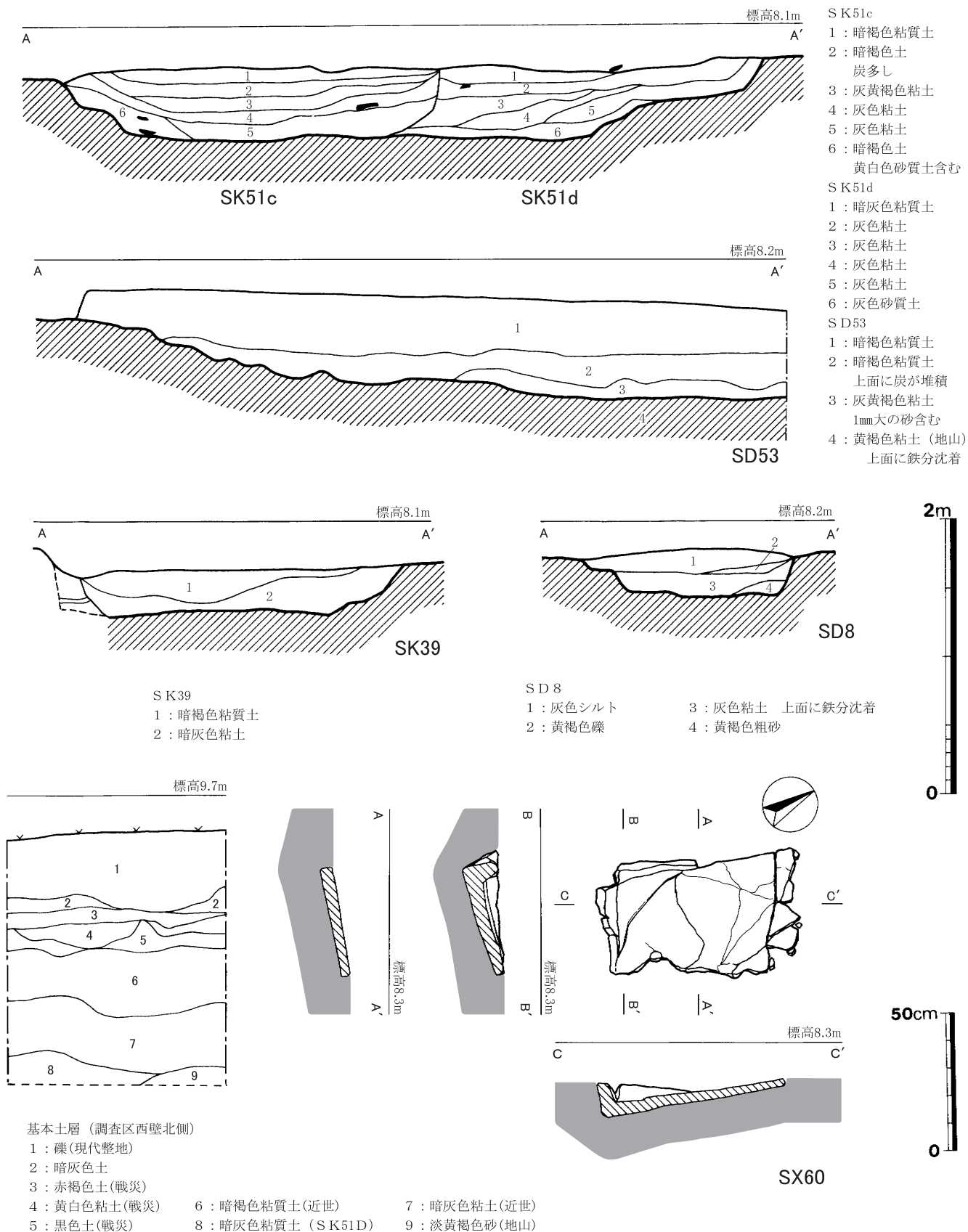
第25図 調査区遠景（南西から）



第26図 調査風景（南東から）



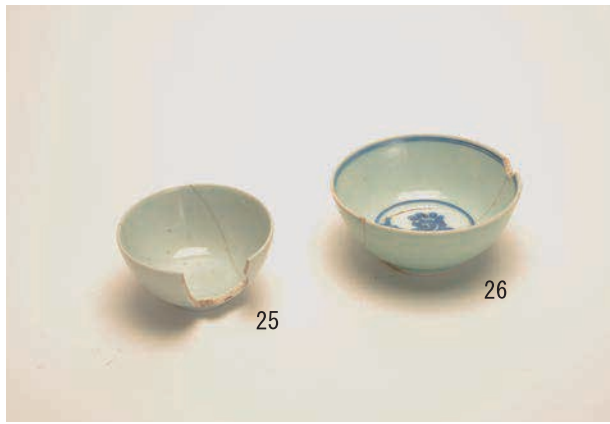
第27図 S D 8 出土遺物実測図（1/4）



第28図 SK51c・d、SD53、SK39、SD8土層断面図、基本土層図、SX60実測図 (1/40・1/20)



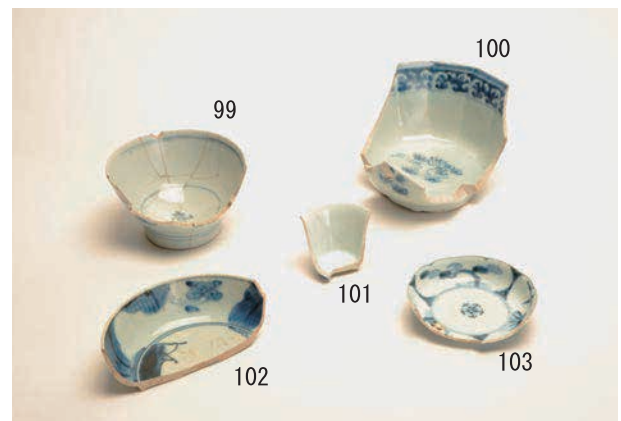
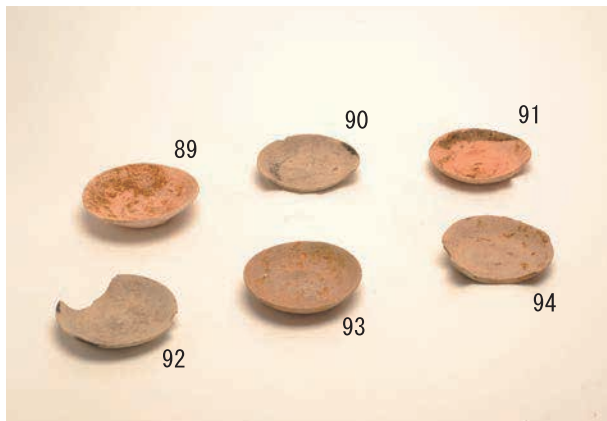
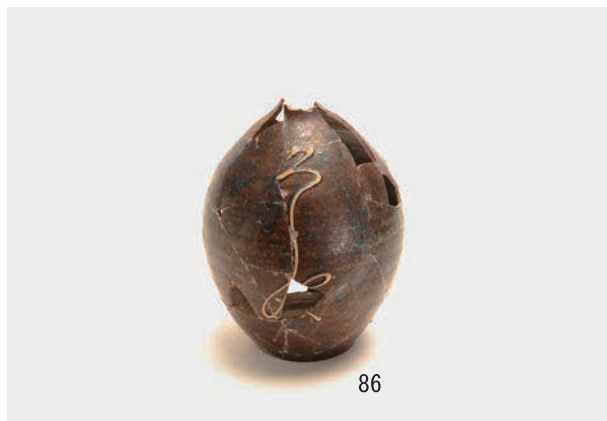
第29図 出土遺物写真 1



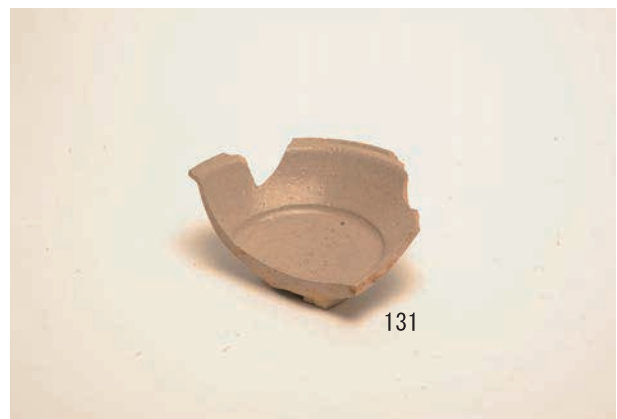
第30図 出土遺物写真 2



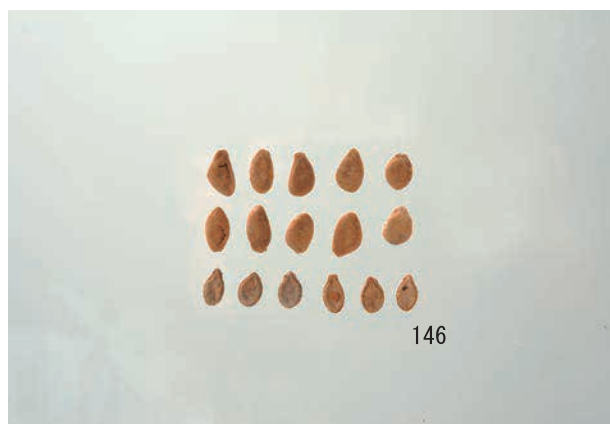
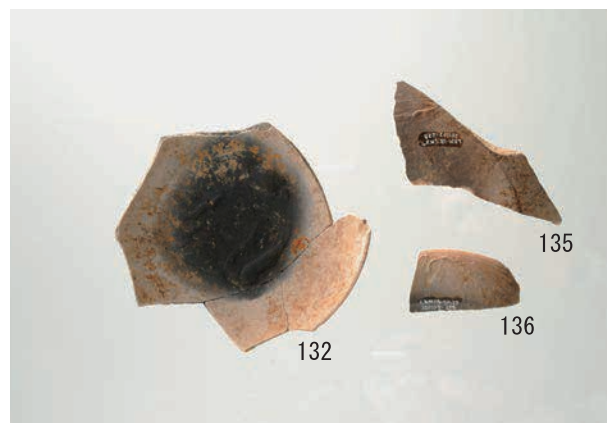
第31図 出土遺物写真 3



第32図 出土遺物写真 4



第33図 出土遺物写真 5



第34図 出土遺物写真 6

第1表 出土遺物観察表1

遺物No.	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎 土 (製作地)	備考	登録番号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
				(長)	(幅)	(厚)								
1	SD8	土師器	坏	13.6	4.2	5.2	黒褐色		回転ナデ	回転ナデ		精良		201102 000384
2	SD8	須恵器	高杯	-	8.1	6.5	灰色		回転ナデ	回転ナデ		精良		201102 000390
3	SD8	須恵器	蓋	[10.4]	-	2.6	灰色		回転ナデ 回転ヘフケズ	回転ナデ		精良	7c後半	201102 000388
4	SD8	須恵器	坏	-	[8.2]	(4.7)	灰色		回転ナデ	回転ナデ		精良	8c前半	201102 000387
5	SD8	須恵器	坏	[13.2]	[10.0]	4.8	灰色		回転ナデ	回転ナデ		微細砂粒	8c前半	201102 000146
6	SD8	土師器	碗	-	[10.0]	[2.1]	橙色		ナデ	ナデ		微細砂粒	8c	201102 000147
7	SD8	土師器	坏	-	[11.2]	(3.3)	橙色		ナデ	ナデ		微細砂粒	8c	201102 000148
8	SD8	土師器	製塩土器?	6.8	6.8	14.5	橙色		指押 板ナデ	粗いナデ		精良	18c末～19c	201102 000383
9	SK2	磁器	広東碗	[12.0]	6.0	6.3	染付		昆虫 山水	岩波		肥前系	18c末～19c	201102 000003
10	SK2	磁器	碗	11.8	5.0	5.6	染付		丸文	寿		肥前系		201102 000004
11	SK2	磁器	覗猪口	8.0	4.2	6.0	染付		草花	五弁花 こんにゃく		肥前系		201102 000009
12	SK2	磁器	碗蓋	-	4.9	3.0	染付		草花	草花		肥前系		201102 000006
13	SK2	磁器	広東碗蓋	-	10.1	2.5	染付		松・岩	鷺		肥前系		201102 000007
14	SK2	磁器	広東碗蓋	-	10.0	3.0	染付		連子	火焰		肥前系		201102 000008
15	SK2	磁器	大皿	[41.4]	[17.0]	5.5	染付		唐草	花唐草		肥前系		201102 000014
16	SK2	磁器	中皿	13.6	8.3	3.4	染付		草	草花		肥前系	くらわんか・18c後半	201102 000013
17	SK2	磁器	中皿	13.6	8.8	3.5	染付		草	山水	蛇の目凹	肥前系		201102 000011
18	SK2	磁器	中皿	14.0	9.0	4.3	白磁			型押菊	蛇の目凹	肥前系	輪花	201102 000012
19	SK2	陶器	小碗	9.3	3.3	4.7	灰釉				高台無釉	肥前系		201102 000020
20	SK2	磁器	火入	6.8	6.1	8.2	青磁					肥前系		201102 000018
21	SK2	土師器	焼塩壺	7.0	5.8	8.0	橙色						銘有り	201102 000029
22	SK2	土師器	焼塩壺	7.8	5.8	9.0	橙色					大阪	「泉湊伊織」・18c中	201102 000028
23	SK2	陶器	播鉢	[38.0]	14.8	15.9	褐釉							201102 000026
24	SK2	陶器	甕	-	12.0	(20.0)	褐釉・白土化粧						便所甕	201102 000198
25	SK5	磁器	小碗	9.0	3.7	4.7	白磁						18c後半	201102 000065
26	SK5	磁器	碗	10.9	5.6	5.1	青磁染付			牡丹		肥前系	18c後半	201102 000066
27	SK6	磁器	碗	14.2	5.6	7.0	染付		草花	五弁花 こんにゃく	文字有り	肥前系	18c	201102 000045
28	SK6	磁器	碗	[15.0]	5.6	7.2	染付		草花	五弁花 こんにゃく	文字有り	肥前系	18c	201102 000044
29	SK6	磁器	碗	[9.4]	3.7	4.8	染付		花唐草			肥前系	18c	201102 000042
30	SK6	磁器	碗	9.7	3.6	4.9	染付		鳥・草花			肥前系	18c	201102 000043
31	SK6	磁器	碗	10.4	4.1	5.4	染付		梅・松			肥前系	18c	201102 000040
32	SK6	磁器	皿	23.2	14.4	4.0	染付		唐草	松竹梅 牡丹	角福	肥前系	輪花	201102 000046
33	SK6	陶器	小碗	9.4	3.7	4.6	褐釉・白土化粧						18c前半	201102 000050
34	SK6	陶器	皿	10.5	3.9	4.1	灰釉			蛇ノ目 釉剥			18c前半	201102 000052
35	SK6	陶器	皿	12.6	4.7	3.7	灰釉			蛇ノ目 釉剥			18c前半	201102 000051
36	SK7	磁器	端反碗	11.8	4.8	5.6	染付		花	花			19c	201102 000079
37	SK7	磁器	端反碗	11.8	4.8	5.9	染付		花	花		肥前系	19c	201102 000080
38	SK7	磁器	広東碗	11.8	5.7	7.6	染付		草花 昆虫	文字有り		肥前系	19c	201102 000074
39	SK7	磁器	端反碗	10.0	4.2	5.2	染付		柳	岩波		肥前系	19c	201102 000078
40	SK7	磁器	端反碗	10.0	4.2	5.2	染付		柳	岩波		肥前系	19c	201102 000077
41	SK7	磁器	端反碗	10.2	4.3	5.4	染付		柳	岩波		肥前系	19c	201102 000076
42	SK7	磁器	向付盃	6.8	3.7	5.4	瑠璃釉					肥前系	輪花	201102 000092

第2表 出土遺物観察表2

遺物No.	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎 土 (製作地)	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
43	SK 7	磁器	碗	8.7	4.9	7.8	染付		梅・龍			肥前系		201102 000086
44	SK 7	磁器	小碗	7.0	3.4	5.0	染付		芒・花			肥前系		201102 000089
45	SK 7	磁器	小碗	7.0	3.1	4.6	染付		芒・花			肥前系		201102 000087
46	SK 7	磁器	小碗	6.8	3.4	4.8	染付		芒・花			肥前系		201102 000090
47	SK 7	磁器	小碗	7.0	3.5	4.9	染付		芒・花			肥前系		201102 000088
48	SK 7	磁器	小碗	6.6	3.0	4.0	染付		唐草？	文様有り	蛇の目高台	明染付		201102 000091
49	SK 7	磁器	鉢	16.5	6.6	7.6	染付		山水	山水・鳥		肥前系		201102 000105
50	SK 7	磁器	鉢	14.5	6.6	6.8	染付		草	菊	蛇の目高台	肥前系		201102 000110
51	SK 7	磁器	瓶	-	5.1	13.0	染付		山水・舟		砂目	肥前系		201102 000111
52	SK 7	磁器	皿	12.3	7.2	3.4	染付		草花	草花	蛇の目凹	肥前系		201102 000104
53	SK 7	磁器	皿	-	10.0	(3.4)	染付			山水楼閣	蛇の目凹	肥前系		201102 000102
54	SK 7	磁器	皿	-	11.0	5.2	染付		唐草	草花	蛇の目凹	肥前系		201102 000103
55	SK 7	陶器	碗	14.2	5.0	5.1	透明釉・金		梅		「清」	京焼風・関西系		201102 000116
56	SK 7	陶器	碗	9.2	5.3	5.3	銅緑釉							201102 000114
57	SK 7	磁器	水滴 (茄子)	4.0	-	2.7	褐釉・呉須					肥前系	型押し	201102 000129
58	SK 7	土師器	人形	-	-	(3.5)	橙色						型押し	201102 000130
59	SK 7	土師器	面子 (猫)	-	2.5	2.3	橙色						型押し	201102 000131
60	SK 7	陶器	土瓶	11.5	-	21.0	灰釉						18c末～19c	201102 000143
61	SK 7	陶器	瓶	6.2	8.8	22.8	灰釉・白土化粧							201102 000138
62	SK 7	瓦	鬼瓦？	-	-	4.0	黒色						650g	201102 000125
63	SK 7	瓦	棧瓦の軒丸	9.2	-	(3.2)	黒色						142g	201102 000127
64	SK 7	瓦	軒丸	10.4	-	(3.2)	黒色						314g	201102 000128
65	SK 39	磁器	小碗	9.4	4.0	4.6	染付		松	荒波		肥前系	18c末～19c	201102 000413
66	SK 39	磁器	広東碗	-	6.0	(5.0)	染付		不明	荒波		肥前系	18c末～19c	201102 000414
67	SK 39	磁器	鉢	[15.0]	7.2	7.6	染付		帯・樹木	ザクロ 梅	「朝」	朝妻焼	18c前半	201102 000417
68	SK 39	磁器	鉢	-	11.0	(6.0)	青磁染付			丸窓に山水		肥前系		201102 000449
69	SK 39	磁器	鉢	14.0	8.5	8.1	染付		幾何学	牡丹 宝尽くし	蛇の目凹	肥前系	八角鉢	201102 000450
70	SK 39	磁器	瓶	4.2	10.5	29.2	色絵		花・丸窓 に山水楼			肥前系	退色	201102 000665
71	SK 39	陶器	小碗	9.2	3.3	5.4	白土化粧		綾杉			肥前系		201102 000418
72	SK 39	陶器	小碗	9.2	3.2	5.0	白土化粧		綾杉			肥前系		201102 000419
73	SK 39	陶器	皿	12.2	4.1	4.6	鉄釉・灰釉					肥前系		201102 000420
74	SK 39	陶器	皿	12.1	3.9	4.2	鉄釉・灰釉					肥前系		201102 000452
75	SK 39	陶器	皿	[11.8]	4.1	4.6	鉄釉・灰釉					肥前系		201102 000453
76	SK 39	陶器	鉢	-	6.2	(9.8)	灰釉・白土化粧		外面無釉			二川系		201102 000485
77	SK 39	石製品	ひき臼	[32.4]	-	9.0	暗灰色					凝灰岩	茶臼	201102 000438
78	SK 40	磁器	碗	[10.0]	4.8	5.8	染付		梅			肥前系	19c	201102 000368
79	SK 40	磁器	広東碗	-	6.2	(3.8)	染付			荒波		肥前系	18c末～19c	201102 000367
80	SK 40	磁器	小碗	7.6	3.5	5.5	染付		花	荒波		肥前系	18c末～19c	201102 000369
81	SK 40	磁器	人形 (鳥)	-	-	(4.2)	色絵					肥前系	18c末～19c	201102 000373
82	SK 40	磁器	水滴	-	-	2.7	染付		葉			肥前系	18c末～19c	201102 000370
83	SK 40	磁器	皿	14.9	8.2	4.6	白磁			梅陽刻	「朝」	朝妻焼	18c末～19c	201102 000401
84	SK 40	磁器	置物	-	-	4.7	呉須・褐釉		楓・樹根			肥前系	18c末～19c	201102 000402

第3表 出土遺物観察表3

遺物No.	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎 土 (製作地)	備考	登録番号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
				(長)	(幅)	(厚)								
85	SK40	磁器	水滴	-	-	4.2	染付		波			肥前系		201102 000397
86	SK40	陶器	貧乏徳利	-	10.0	(22.6)	褐釉		「儀・くしや」			赤坂？		201102 000411
87	SK51b	陶器	瓶	7.0	3.4	3.7	褐釉							201102 000465
88	SK51b	磁器	瓶	-	5.0	(3.3)	染付							201102 000466
89	SK51b	土師器	小皿	7.5	3.2	1.4	浅黄橙色		回転ナデ	回転ナデ	糸切り			201102 000471
90	SK51b	土師器	小皿(灯明)	6.9	4.5	1.2	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	糸切り			201102 000472
91	SK51b	土師器	小皿	6.8	4.3	1.2	浅黄橙色		ナデ	ナデ	糸切り			201102 000473
92	SK51b	土師器	小皿(灯明)	6.8	4.4	1.1	浅黄橙色		ナデ	ナデ	糸切り			201102 000474
93	SK51b	土師器	小皿	7.2	4.1	1.3	浅黄橙色		ナデ	ナデ	糸切り			201102 000475
94	SK51b	土師器	小皿	6.7	4.5	1.3	浅黄橙色		ナデ	ナデ	糸切り			201102 000476
95	SK51b	土師器	火鉢	-	21.4	(7.6)	黒褐色		型押七子			坂東寺系		201102 000484
96	SK51b	瓦	軒丸	15.5	-	(9.3)	黒色		三巴					201102 000463
97	SK51b	瓦	鬼瓦？	(17.1)	(11)	4.6	黒色							201102 000480
98	SK51b	瓦	部品？	(10.5)	-	5.0	黒色							201102 000481
99	SK51c	磁器	広東碗	11.4	6.3	6.4	染付		蝶・銀杏 蔓草	「寿」		肥前系	18c末～19c	201102 000488
100	SK51c	磁器	鉢	15.7	8.4	8.7	染付		鶴・吹墨	鶴・吹墨		肥前系	18c末～19c	201102 000504
101	SK51c	磁器	盃	[6.4]	3.2	4.7	染付		草花			肥前系	18c末～19c	201102 000503
102	SK51c	磁器	皿	[13.4]	9.2	4.1	染付		蔓草	草花	蛇の目凹	肥前系	18c末～19c	201102 000499
103	SK51c	磁器	手塩皿	9.7	5.7	2.6	染付		蔓草	五弁花・ 松竹梅	「朝」	朝妻焼	18c前半	201102 000495
104	SK51d	磁器	広東碗	-	6.6	(2.5)	染付				「寿」	肥前系	18c後半	201102 000541
105	SK51d	磁器	碗	10.9	4.4	5.8	染付		草花			肥前系	18c後半	201102 000542
106	SK51d	磁器	皿	-	-	(2.4)	染付			草花		肥前系	18c後半	201102 000548
107	SK51d	磁器	皿	-	-	(1.5)	染付			牡丹	砂目			201102 000551
108	SK51d	磁器	皿	-	-	(4.3)	染付		草	牡丹・蛸 唐草		明染付？		201102 000552
109	SK51d	磁器	手塩皿	[9.4]	[6.0]	2.6	染付			草花		朝妻焼？	18c前半	201102 000553
110	SK51d	陶器	灯明皿	[8.0]	4.4	1.8	褐釉							201102 000558
111	SK51d	陶器	碗	-	4.5	(3.0)	灰釉				まな尻			201102 000557
112	SK51d	陶器	中皿	[14.2]	4.8	3.6	灰釉				砂目		17c前半	201102 000559
113	SK51d	土師器	火鉢	[29.0]	-	(9.7)	黒褐色		型押七子 牡丹			坂東寺系		201102 000561
114	SE13掘方	磁器	碗	-	4.7	(2.9)	白磁					肥前系	18c	201102 000167
115	SE13掘方	磁器	小碗	8.5	3.1	3.6	染付		蝶			肥前系	18c	201102 000164
116	SE13掘方	磁器	小碗	[9.8]	4.2	4.8	染付		菊・草花		角福	肥前系	18c	201102 000165
117	SE13掘方	磁器	皿	-	[15.0]	(4.1)	染付			松 花唐草		肥前系	18c	201102 000168
118	SE38	磁器	皿	[26.0]	15.4	4.2	染付			竹・梅・鳥	ハマ	肥前系	輪花18c末～19c	201102 000339
119	SE38	磁器	皿	[13.0]	7.8	4.6	染付			貝・藻	「奇玉・鼎之」		18c末～19c	201102 000333
120	SE38	磁器	皿	-	-	(1.8)	染付			牡丹	文様有り	肥前系	18c末～19c	201102 000337
121	SE38	磁器	皿	[11.6]	[7.4]	5.6	染付		草	菖蒲		朝妻焼	18c前半	201102 000332
122	SE38	磁器	香炉	7.4	4.8	5.2	染付		山水	内面無釉	「朝」	朝妻焼	18c前半	201102 000331
123	SE38	磁器	碗蓋	3.9	11.4	2.9	染付		草花		「朝」	朝妻焼	18c前半	201102 000340
124	SE38	磁器	小碗	[7.2]	3.7	4.4	染付		松竹梅		「朝」	朝妻焼	18c前半	201102 000326
125	SE38	土師器	小壺	5.4	3.2	5.3	橙色		ナデ					201102 000354
126	SE38	土師器	小壺	-	3.7	8.3	橙色		ナデ					201102 000353

第4表 出土遺物観察表4

遺物No.	出土遺構	材 質	器種	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎 土 (製作地)	備 考	登録番号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等			
				(長)	(幅)	(厚)								
127	SE38	陶器	瓶	2.0	7.5	8.0	褐釉		人物陽刻					201102 000351
128	SE38	陶器	灯明皿	5.6	3.1	3.6	褐釉		回転ナデ	回転ナデ	糸切り			201102 000357
129	SE38	陶器	皿	11.4	4.0	3.6	灰釉							201102 000355
130	SE38	陶器	皿	11.5	4.2	3.4	灰釉			蛇ノ目釉剥				201102 000349
131	SP21	陶器	溝縁皿	[14.0]	4.3	4.1	灰釉				兜巾		17c	201102 000187
132	SK7	土師器	皿	[13.4]	7.2	2.0	浅黄橙色		回転ナデ	陽刻鶴亀松	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000123
133	SK7	土師器	皿	-	[7.0]	(1.5)	浅黄橙色		回転ナデ	回転ナデ	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000121
134	SE38	土師器	皿	[11.4]	6.7	2.1	浅黄橙色		回転ナデ	回転ナデ	底部ナデ 消し			201102 000361
135	SK27	土師器	皿	-	[6.8]	(1.8)	浅黄橙色		回転ナデ	回転ナデ	底部ナデ 消し・陽ナデ			201102 000228
136	SK29	土師器	皿	[10.0]	-	1.7	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	底部ナデ 消し・陽ナデ		底部内面 黒斑	201102 000256
137	SK29	土師器	皿	-	[6.2]	(1.5)	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000257
138	SK51b	土師器	皿	-	[6.4]	(0.7)	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000616
139	SK40	土師器	皿	[11.4]	6.8	1.9	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000409
140	SK40	土師器	皿	12.2	7.2	2.3	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ	底部ナデ 消し		底部内面 黒斑	201102 000408
141	SK6	石製品	砥石	-	-	-	灰黄色					318g	砂岩？	201102 000056
142	SK40	石製品	硯	(8.2)	5.7	2.9	灰黄色					218g	天草砥石を転用	201102 000376
143	SK51b	木製品	下駄	11.1	-	5.7	暗褐色							201102 000664
144	SK39	木製品	下駄	23.0	7.0	2.7	茶褐色							201102 000662
145	SK39	木製品	椀	23.0	7.7	3.5	黒漆	朱漆			文字有り			201102 000663
146	SK2	種子	ウリ科	-	-	-	暗褐色						506個	201102 000183
147	SK39	魚骨	椎骨	1.5	-	-	暗褐色							201102 000672
148	SK39	種子	モモ属	2.0	-	-	暗褐色							201102 000673
149	SK39	種子	モモ属	2.5	-	-	暗褐色							201102 000674
150	SK39	種子	マツ属	4.3	-	-	暗褐色							201102 000675
151	SK39	種子	マツ属	4.6	-	-	暗褐色							201102 000676
152	SK39	種子	マツ属	6.6	-	-	暗褐色							201102 000677
153	SK51d	銅製品	煙管雁首	(2.7)	-	-	緑青色					1.9g		201102 000667
154	SK51d	銅製品	煙管吸口	3.9	-	-	緑青色					3.4g		201102 000668
155	SK2	銅製品	煙管雁首	6.5	-	-	緑青色					4.0g		201102 000184
156	SK51b	銅製品	煙管吸口	6.7	-	-	緑青色					3.4g		201102 000482
157	SK40	銅製品	煙管雁首	5.1	-	-	緑青色					6.6g	木質有り	201102 000381
158	SK40	銅製品	煙管吸口	7.8	-	-	緑青色					9.1g		201102 000382
159	SK2	銅銭	寛永通寶	2.3	-	-	緑青色					2.3g	新寛永	201102 000185
160	SK51b	銅銭	寛永通寶	2.2	-	-	緑青色					1.9g	新寛永	201102 000483
161	SK51c	銅銭	寛永通寶	2.5	-	-	緑青色					2.4g	古寛永	201102 000511
162	SK51d	銅銭	寛永通寶	2.3	-	-	緑青色					1.4g	新寛永	201102 000669

IV. まとめ

検出された遺構と遺物から、本調査地の状況について時代順に述べる。まず古代であるが、SD 8は、7世紀から8世紀前半ごろの所産と考えられる。この溝の方向は、後述するSD 53と近い軸をとっており、これは、西側の京町から久留米城本丸にかけて広がる台地の南東側の縁辺を形成するラインと平行している。つまり、SD 8は地形に沿った方向を示しており、この台地上に日輪寺古墳を含む古墳時代から古代にかけての集落があり、その集落の外縁の排水や区画の機能を持った溝であった可能性が考えられる。

つぎにSD 53についてであるが、蛇行する平面形状、20m以上という長さ、緩やかに傾斜する断面形状、水平堆積する埋土、葦等の植物が群生した痕跡と考えられる小ピット群の存在などから、旧河川であると判断した。先にも述べたように沼や池の可能性も捨てきれないが、第35図の明治25年久留米市明細図を見ると、本調査地の西側から始まり、南西の縄手方面へと流れる小河川が記されている。SD 53も調査区を北東から南西へ横切ることから、この川の源流である可能性が高く、沼や池ではないと思われる。SD 53は直接の出土遺物はないが、埋土上面から掘り込まれたピットSP 21から17世紀前半の溝縁皿が出土しており、SD 53が17世紀前半かそれ以前に埋没したことが分かる。本調査区からはほとんど18世紀以降の遺物しか出土しないことを考えると、本調査地を含む亀屋町が、有馬豊氏入封後に、この川を埋め立てて建設されていると考えられる。田中氏時代の久留米城付近は、文献やこれまでの発掘成果から、城郭、侍屋敷、内町、元町、三本松町、柳原町、洗切りがあったと考えられており、おおまかな位置関係が第36図のように想定されている。SD 53の旧河川がその源流をどこに持つかというとは明らかでないが、両替町から亀屋町にかけては谷状の低地をなしており、池町川が分かれてこの谷の中で川筋を変えながら西流していることも考えられる。（第39図）

本調査地の河川が埋め立てられ、町屋が建設された当初の17世紀中頃の遺構・遺物は検出されず、今回はその様相を明らかにすることはできないが、17世紀後半に関しては、延宝八年図に町屋の表記がある。SE 38やSK 40などは、19世紀の遺物が主体をなすが、朝妻焼などの18世紀前半の遺物も出土している。

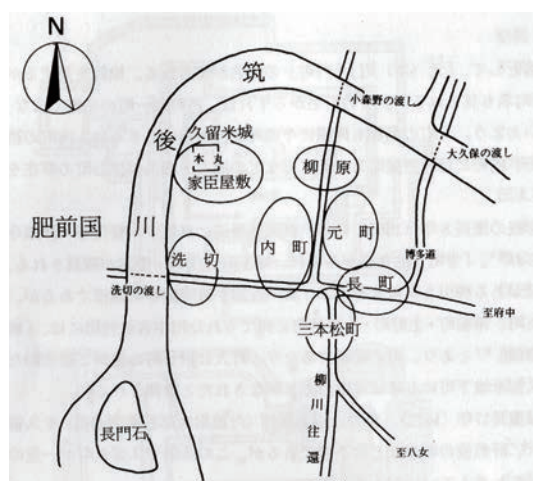
調査区は南北に長い町屋一軒分のほぼ南半分について調査したものであり、敷地中央と思われる位置に井戸や方形土坑（地下室か）があり、南側にはゴミ穴と考えられる円形土坑が検出されている。石列2から石列3の幅は13.2mであり、屋敷地の間口は6.8間となる。呉服町の調査（久文報第104集）から呉服町と魚屋町の間口が比較されているが、呉服町では平均4.24間、魚屋町では平均2.55間であり、それに比べると本調査地の町屋は間口が広い。第37図の久留米市土地寶典では本調査地は147.03坪と記されており、間口13mとすると、奥行きが36.75mとなり、本調査地と一致する。調査において、石列2と石列3の間には土坑があり、筋状に空く空間もなく、柱列、垣根等の痕跡もないことから、この地割が近世まで遡ると考えられ、本調査地の町屋が間口の広いものであったことが分かる。

この敷地にどのような建物が建っていたか検討したい。瓦の枚数（遺構別詳細は第5表参照）は、合計で1431点であり、平瓦が1118点、丸瓦が254点、軒平瓦が25点、軒丸瓦が21点、鬼瓦かその部品が5点、棧瓦が8点である。遺構の時期は概ね18世紀後半から19世紀にかけてであり、約100年の間に蓄積された瓦の枚数であり、そのまま建物の実態を表してはいないが、本調査地の景観について多少の情報を提供するものであると考えてよい。ただ、軟弱地盤であるため、土坑等を埋め戻す際に、他所から運び込まれた可能性も捨てきれない。棧瓦の出土量は極めて少ないが、平瓦や平瓦と同一遺構から出土しており、18世紀後半以降においても棧瓦が本格的に導入されていない可能性を示している。本調査地は、大手門前のメインストリートであり、当時あった建物が瓦葺であった可能性は考えられる。17世紀後半ごろに描かれた「久留米藩領図屏風（第38図）」を見ると、何軒かおきに瓦葺の町屋が見受けられる。18世紀後半から19世紀にかけては、度重なる火災の影響もあり、この屏風が描かれた頃よりも瓦葺の商家が増えていたのではなかろうか。

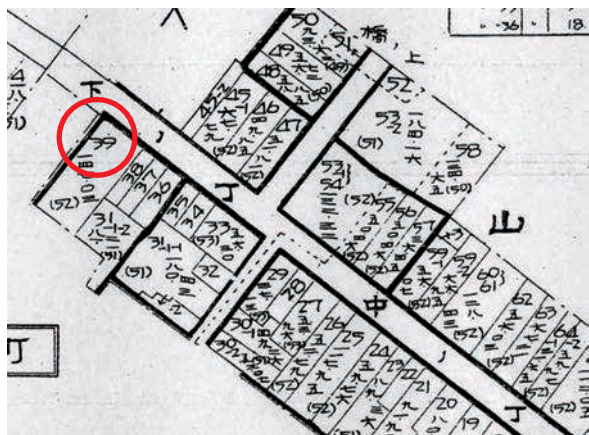
瓦の出土数が多いことから富裕な商家であったことが伺える。砂漆喰製の水盤や、何かを挿り潰す為と思われる砂漆喰製の据え付け盆状遺構は、切り合い関係から19世紀に位置付けられる。これらから、本調査地に18世紀後半から19世紀にかけて営まれた町屋は、店舗であり、何らかの作業を伴う職業を営んでいたと考えられる。



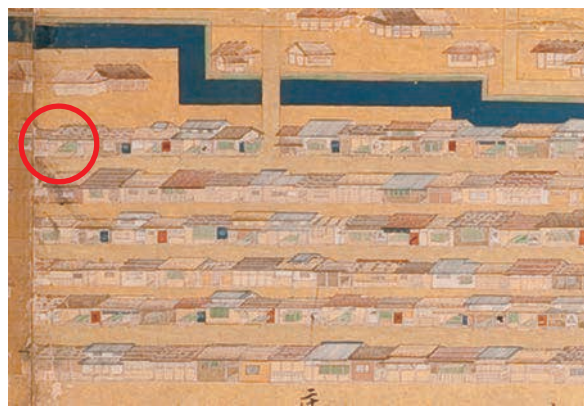
第35図 久留米市明細図（部分）



第36図 田中代の久留米城下町概念図（久文報第74集より）



第37図 久留米市土地寶典（部分）



第38図 久留米藩領図屏風（部分）

第5表 久留米城下町遺跡第18次調査出土瓦数

遺構名	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	棧瓦	鬼瓦 (部品) ?
SK2	65	12		2	1	
SK5				1		
SK6	4	2				
SK7	12	3	1	3	1	1
SK12	3		1	1		
SE13 掘 方	25	7				
SK14	3					
SP15		2				
SP25	1					
SK27	26	4	1			
SK28	3	1				
SK30	182	14		2		1
SK31	70	3				
SK33	1					
SK34	2					
SK36	89	36	4	2		
SK38	115	46	1	1	1	
SK39	73	15	1	3		
SK40	47	8	2		2	
SK51b	202	49	4	5	1	2
SK51c	20	8				1
SK51c.d	78	16	3		2	
SK51d			1			
SK54	22	1				
SK60	14	6	3	1		
SD8の 上の整 地層	17					
SE13の 東整地 層	37	14	3			
石列2の 西整地 層	7	7				
小計	1118	254	25	21	8	5
合計	1431					



第39図 旧河川復元図

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうかまちいせき　だい18じはつくつちょうさほうこく							
書　　名	久留米城下町遺跡　　　　　　一第18次発掘調査報告一							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第316集							
編　著　者　名	江頭　俊介							
編　集　機　関	久留米市　市民文化部　文化財保護課							
所　在　地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町 15-3　　TEL:0942-30-9225　　FAX:0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2012（平成24）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	発掘期間	発掘面積	発掘の 原因
		市町村	遺跡番号					
く　　る　　め じょうかまちいせき 城下町遺跡 第18次調査	く　　る　　め　　し じょうなんまち 城南町	40203	—	33° 19’ 14”	130° 30’ 20”	20110516 ～ 20110730	367㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
久留米 城下町遺跡 第18次調査	集落	古代 近世	石列 溝 土坑 井戸 ピット	3条 2条 31基 2基	土師器、製塩土器？、 須恵器、近世陶磁器、 石器、青銅器、木器、 瓦		亀屋町の北西 角の町屋。	
要　約								
亀屋町の北西角の町屋跡を調査した。18～19世紀の土坑等が検出され、多量の陶磁器、下駄などが出土した。また、7～8世紀の溝を検出し、須恵器や製塩土器かと思われる土師器などが出土した。北西の台地上に古墳時代から古代の集落がある可能性が高まった。有馬氏時代以前の旧河川を検出し、田中氏時代の町割や地形の復元に有用な情報が得られた。								
土木工事の届出日	平成23年3月10日			遺物の発見通知日			平成23年8月5日	

久留米城下町遺跡
(亀屋町)

—第18次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第316集

平成24年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市市民文化部文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社